

そよ風に歌声を乗せて (改訂版)

おにぎり(鮭)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

心に傷を負った少年は、友達なんているないと言つた。

心に傷を負つた少女は、貴方と友達になりたいと言つた。

そんな少年と少女の出会いは二人を大きく変えることになる。

「もしボカロが人間だったら」的な、作者による妄想100%でお送りする物語です。ボ
カロキャラの性格や設定は全て作者の妄想によつて決められているので、それを許容で
きる方はどうぞ生暖かい目で読んでいてください。

ハーメルンで投稿されている同タイトルの小説の改訂版です。ある程度物語が進ん
だ時点での改定前の物は削除させていただきます。

目

次

第1話

出会い

第2話

出会い2

第3話

晴れやかな入学式、晴れない心

第4話

独りの少年

第5話

独りの少年

45

37

21

11

1

第1話 出会い

4月。それは出会いの季節。数多くの人間が進級ないし進学、または就職をすること で周囲の環境が変わる季節。多くの人間はそんな未知の環境に期待と不安がない交ぜになつた気持ちを抱いて新たな一步を踏み出そうとしていることだろう。

勿論俺こと天川駿あまのがわしゅんもその中の一人に入る……なんてことはなく、進学するにあたつて新しく越してきたアパートの自室で普段と変わらずゲームの攻略にいそしんでいた。「よし…よし…あとちよい……」

決して楽ではないエリアバスとの戦闘。死にゲーと名高いだけあつて今プレイしているゲームは一筋縄ではクリアできそうもない。そんなだから人を選ぶゲームではあるが、決して理不尽な難易度設定というわけではなくクリアできた時の快感はかなりのものだ。

『ぐあああ……』

「あ”あ”あ”あ”あ”!!」

とは言えそこはやはり高難易度アクションRPG。一瞬の油断でこれまでの努力がすべてパーになつてしまつた。画面から響くプレイヤーキャラクターの断末魔と、でか

でかと画面に映る『YOU DIED』の文字。思わず近所迷惑も気にせずに大声を出してしまった。：最も、出来たばかりらしいこのアパートには俺以外には大家さんしかいないのでクレーム付けてくる住人がそもそも存在しないのだが。

それはともかく、あと一步。もつといえば後強攻撃一発分というところまでボス体力を削つたというのに、最後の最後で緊張からか、はたまた勝利を確信したことで油断が生じてしまったのか判断を誤り6割近く残っていた体力を一瞬にして溶かされてしまつた。自分のキャラクターの装備が防御力よりも機動力を重視していたのを差し引いても高火力なボスの攻撃への不満と、最後でミスをしてしまつた不甲斐ない自分への怒りで一気にストレスが溜まる。

さらに追い打ちをかけるように、自キャラが復活したところはおおよそボスの待ち構えるフロアから近いと言えるような場所ではなかつた。ただでさえ到達するのにはそれなりの労力が必要なので、これには流石にげんなりせざるを得ない。

「……喉乾いたな」

キャラが死んでしまつたことでそれまで張りつめていたものがぶつんと音を立てて切れてしまつたのか、一気にのどの渴きを覚える。当然だ。かれこれ水分補給をするとなく数時間はモニターとにらめっこしていただけだから。

のどの渴きを癒したいところだつたけれど、今家に飲み物らしい飲み物はなかつたよ

うな気がする。何かありますようにと祈りながら冷蔵庫を開けるも、残っているのは僅かばかりの食糧。ああ、そろそろまた買い出しに行かないとな。

さて、どうしたものかとその場で腕を組みしばらく考え込む。水分補給をする、とう目的だけであれば台所の蛇口から出る水道水でも十分目的だ。が、まあ所詮水道水。お世辞にも進んで飲みたいと思えるような味ではない。カルキ臭いし……：

とは言え、今から買い出しに向かうというのもなんだか面倒だつた。そもそも、まだこの町に引っ越してきてからそんなに経っていない。一応学校と、スーパーへの道筋位は覚えたがそれもちよつとあやふやだ。変に出歩いて道に迷いましたなんてシャレにもならない。

「うーむ……どうしたものかねえ」

どうしたものかなんて呟いたところで飲み物が湧いて出てくるわけでもなく、あるのは水道水だけという事実は変わらない。散々悩んだ挙句、たまには外に出るのも悪くないと思うことにして最寄りのスーパーまで飲み物を買いに行くことにした。道中で自販機かコンビニを見つけられるといいなんて考えながら。

手慣れた動きで戸締りをし、いざ出発だと振り向くと大家さんの姿が目に入る。落ち着かない雰囲気で視線を道路と時計との間を行つたり来たりさせていた。何か、あるいは誰かを待つていていたみたいだった。まあ大家さんが何を待つていいようと俺にはこれつ

ぽつちも関係ない。会話をするのも面倒くさいし、さつきと買うもの買つて来よう。

「やあ天川君！ 良いところに来てくれた！」

「すいません俺忙しいんでまた後にしてください」

「まだ何も言つてないんだけど」

やかましい。どうせ何か面倒なことをさせるつもりだつたんだろう。お断りだ。物
だろうが、人だろうが探せと言われても探すものか。というか、そんなことをすればミ
イラ取りがミイラになりかねん。どつちにしろ無理だ。後留守番をお願いされても困
る。割とマジでのどが渴いてるから、早く何か買つて飲みたい。

「まあまあそんな嫌そうな顔しないで話だけでも聞いてよ」

「えー……留守番してくれとかやめてくださいよ。俺忙しいんで」

「違う違う。いや実はさ、今日新しい入居者の人が来るんだよ。で、その子2時過ぎには
来るつて言つてたんだけど……」

そう言われて携帯の時計で時間を確認する。時刻は3時を回つたところだった。成
程1時間は遅刻をしているらしい。そりやひつきりなしに時計と道路を交互に見てた
わけだ。

だがやはり俺には関係ない。そもそも、完全に迷子じやねーか。辺りの地理に詳しく
ない俺が迷子探しというのは、やはり荷が重すぎる。仮に見つけられたとしても、帰れ

ないなんてことになりかねない。この辺りは閑静な住宅街で、分りやすい目印なんてほとんどない。

「……申し訳ないつすけど、迷子探しは俺には無理つすよ。道、覚えてないし」

「だよねえ……まあ、どこかに行くんでしょ？見かけたら連れて来てよ」

「連れてきてよつて……見た目も知らないのにそんなことできるわけないでしょう」

「綺麗な青緑色の髪をした、超かわいい子。もしかしたら駿君にも春が……」

「失礼します」

「あ!? ちよつとーー！」

余計な一言を入れなければ最後まで聞いたかもしだれん。が、なんかすごくイラッとしたのでそそくさとその場を離れた。どうせ俺は万年冬男だ。まあ、春を迎える気がハナからないんだが。そもそも他人とそんな関係になろうとすら思わない。なつたところで、最後は口クな結末にならないのだから。

結局途中で自販機もコンビニも見つけられず（いつも通つてる道を通つただけなのだから当然だが）、スーパーまで行つて飲み物とお菓子、それと軽めの夜食を買つて帰路につく。

あとは家に帰るだけ。もしかしたら件の入居者がまだ来ておらず、大家さんがまたアパートの前で待ちぼうけているかもしれないがその時は無視をして家に入ろう。学校

が始まる前にまだまだやりたいことがたくさんあるのだから。

(学校……か)

ふと中学時代のことを思い出してしまう。とても、思い出して気持ちのいい記憶とは言えなかつた。むしろその逆だ。あんな記憶、さつさと忘れててしまいたい。だからこそ、地元を離れこの都会でもなく、かといつて田舎過ぎることもない有賀島市の市立高校へ進学したんだから。

嫌なことを思い出してしまい、やや気分が落ち込む。ふう、と小さくため息をついて空を見上げた。

時刻は3時30分を回ろうとしていた。そろそろ夕暮れだ。空も少しづつオレンジ色に染まつてきている。

雲一つない空。何の気なしに、俺は空に向かつて手を伸ばした。当たり前だけど、何も掴めない。手の届く範囲に掴めるものは何もない。だけど、雲一つない空に向かつて手を伸ばせば何もない俺でも何かを掴めそうな気がした。

「まあ、そんなわけ……ねえよな」

自嘲気味にそう呟く。無いものは無い。ありもしないものを掴もうとしたつて、その手は空を切るばかりだ。仮に何かを掴んでも、直ぐに指の間から零れ落ちて行つてしまふ。人がその手に掴めるものなんて、そんなに多くはない。

そこまで考えてまた自嘲気味に笑う。高校の入学を前に、少しナーバスになつてゐるのかかもしれない。こここの所、こんな暗いことばかり頭に浮かんでしまう。

そんな俺の耳に、小さな音が聞こえてきた。風の音ではない。

(……歌……誰か歌つてるのかな?)

小さな、本当に小さな音だつた。けれども、どうしてかその音をたどつてみたくなる。もつとちゃんと聴きたいと、なぜか思った。

こつちかな、いやあつちかななんてことを繰り返しながら細い糸を手繰り寄せるように歌が聞こえてくる方へと歩く。そうして吸い寄せられるように小さな公園の前へと出た。どうやらここから聞こえてくるらしい。

一体どんな人が歌つているのだろうと、公園へと近づいていく。そこには、綺麗な青緑色の髪をした女の子がいた。どうやら、歌は彼女が歌つていたらしい。

(……綺麗だな)

それがまず最初の感想だつた。透き通るように、それでいて聴いているものを包み込むような優しい歌声。聴いていて、とても気持ちが穏やかになつていくのを感じる。けれども、その歌の歌詞はどこか悲壮感を漂わせているようだ……。

(はつ…!? 俺は一体何をしているんだ)

そこまで考えて我に返る。これは完全に覗きをしているようなものだ。別に女性の

着替えを除いたわけじやないから警察沙汰なんてことにはならないだろうけど、明らかに今の俺は不審者のようなものだろう。

彼女に存在を気取られる前にこの場を離れなくてはとポケットに突っ込んだ手を勢いよく引っ張り出して踵を返す。そして足早にその場を立ち去った。

公園が見えなくなる辺りまで歩いて、ようやくほつと一息つく。なんだか今日は特に調子がおかしい。やはりそれだけ来る高校生活にナーバスになつてゐるのだろうか。だとしたら……

そんなことを考えていたせいか、後ろから近づいてくる足音に全く気付かなかつた。

「あの……すいません」

「のわあつ!?

驚きのあまり、変な声が出る。そのことに恥ずかしさを覚えながらも振り返ると、そ

こには先ほどの少女が慌てた様子で立つていた。

「ごめんなさい! 驚かすつもりじゃなかつたんです! でも財布を落としていつたみたいだから……」

「え……?」

そういうわけで、慌ててポケットに手を突っ込む。確かに、財布はなかつた。おそらくさつき公園から離れようとしたときに勢いよくポケットから手を引っ張り出した弾み

で落としてしまつたんだろう。そして、目の前の少女が俺の財布を差し出してくれていた。

「あ……どうも」

非常に気まずい状況だけれど、ひとまずお礼だけは言つた。けれど、それ以上話すこともないし何も思いつかない。とにかく頭の中が真っ白になつてしまつていた。
どうにかしようにもどうにもならないので、とにかくその場から逃げるようになじやあ、と一言だけ口にして少女に背を向ける。

けれどもそんな俺を再び少女は呼び止めた。

「あつ、あの！ ちょっと道を聞きたいんです！」

その言葉を聞いてハツとする。綺麗な青緑色の髪をした女の子……大家さんが言つていていた新しい入居者の特徴と一致していた。まさかそんな偶然はあるはずがないだろうと思いつつも、取りあえず応対する為に振り返る。

「あの……私このアパートに行きたいんですけど、道に迷っちゃつて……」

そういうつて少女が差し出してきた手書きの地図には、俺が住んでいる歌田音アパートに印がついていた。どうやら、運命の女神さまとやらは相当にいたずら好きらしい。

とにもかくにも、大家さんが探していた人を見つけてしまつた以上は無視するわけにもいかない。そろそろ辺りも暗くなるし、同じアパートに住む人をほつたらかしにして

何か事件に巻き込まれでもしたら寝覚めが悪い。ひとまず、案内だけはしよう。

「……ああ、このアパート俺が住んでるところつすね」

「え、ホントですか！助かつたあ！」

「……とりあえず、案内するんで」

どうやら相当困っていたらしく、目的地にたどり着けることに安堵のため息をつく少女。そんな彼女を尻目に、俺はさっさとアパートに向かつて歩き始めた。その後を件の少女が慌てて追いかけてくる。

そんな俺達を包み込むように気持ちの良いそよ風が吹いた。

これが、この先俺を大きく変えることになる『初音未来』^{はつねみく}との出会いだつた。

第2話 出会い2

「あ、あの！も、もう少し……ゆっくり歩いて……！」

肩で息をしながら前を行く男の子から離れない様に必死に追いかける。引っ越し用の大きな荷物は明日引っ越し業者の人を持つてきてもらうからそこまで大きな荷物はないけれど、それでもお出かけするには大きすぎる荷物を持っているからあんまり速く歩かれちゃうと私としてはすごく辛い。

だからもう少しゆっくりと歩いてほしいと声を掛けたら、一瞬だけちらりとこっちを見て歩く速度を落してくれた。良かった。無視されたらどうしようかと思つた。

「…………」

それにもしても沈黙が痛い。さつきからこの人、一言もしやべらない。私は私でさつきまではついていくので精一杯だつたから喋る余裕がなかつたつていうのもあるんだけど。それにしたつて本当に喋らない。一応、ご近所さんになるんだからもう少しあいさつ代わりの世間話位した方がいいと思うんだけど……

なんて思つても私も何を話したらいいかちつとも思いつかない。何か話さなきや、と

思えば思う程何を話したらいいかが分らなくなつて結局無言でついていくことだけしかできなかつた。

それでもこの人を見つけられた時は嬉しかつた。初めての一人暮らしで勇んで実家から飛び出してきたのはいいんだけど、地図を読み間違えたのか何時まで経つてもアパートに辿り着かなくてたまたま見つけた公園で途方に暮れていたところだつたから。

どうしようもなくつて氣を紛らわせようと自分の好きな歌を歌つていたんだけど、ふと気が付いたら視界の端に誰かがいたような気がした。とにかく道を聞いたかつたら慌てて後を追いかける途中で財布を見つけて、今に至る訳なんだけど……

ちよつとホントに沈黙が痛い。もしかして私つて避けられてるのかな。……まあ、道に迷つてるんだから面倒だなつてくらいは思われても仕方ないとは思うんだけど。

結局それから一言も会話をすることもなく目的地に着いた。すると前の方からさつきの男の子じやない人の声が響く。

「ああ、天川君！見つかつたかい？」

見つかつたかい、という問いかけを目の前の男の子がされているということは当たり前だけど探されていたみたい。そりやあ本当だつたら2時間近く前に着くつてことになつっていたんだから当然だ。

(あれ、じゃあこの人は私のことを……?)

もしも大家さんの言葉通りなら、この目の前の『天川』と呼ばれた人は私を探しに来てくれたつことになる……のかな。

「見つかりましたよ。この人でいいんでしよう? それじゃあ俺はこれで」

そういうつて天川君は私の前からどいて、そのまま自分の部屋へと向かって行つてしまつた。

「あつ……折角だから初音さんとあいさつ位……全く、そんなに嫌がらなくてもいいだろうに」

「……」

「おつと、待たせてごめんね。初音未来さん……で、いいかな?」

「はい。今日からお世話になります、初音未来です」

自己紹介をして頭を下げる。そんな私に大家さんはあははと笑つた。

「そんなに固くならなくていいよ。まだうちも出来たばかりだし、入居者は初音さんとさつきの男の子しかいないからね」

「さつきの子つて……」

天川と呼ばれた男の子が去つていった方に目をやる。もう自分の部屋に入つてしまつたのか、そこに彼の姿はなかつたけど。

「天川君っていうんだ。あの子もついこの間越してきたばかりでね。今年から高校に進学するっていうんだけど、実家から離れてるみたいだから友達もいないらしいんだ。ちょっと不愛想だけど悪い子じゃないから良ければ仲良くしてあげてな」

「はい。頑張ります」

それから少しあパート生活について説明された後、部屋の鍵を渡された。私に鍵を渡すと大家さんは自分が101号室にいることを告げてゆつたりとした足取りで自分の部屋へと歩いて行つた。

そんな大家さんの姿を目で追いながら、私はさつきの天川君のことを考えていた。
 （あの人……今年から高校つてことは私と同じ年つてことだよね。同じ高校なんだろうし、仲良く……出来たらいいなあ）

第一印象は不愛想な人。アパートに着くまで結局一言も話してくれなかつたし、大家さんとのやり取りからもそんな印象を受けた。少なくともフレンドリーな人ではないのは確かだと思う。

大家さんには仲良くしてくれつて言われたけれど、正直ちょっと自信ない。だけど、なんとなく……なんとなくだけどあの人は仲良くなれそうな気がした。根拠なんてない。ただ本当に直感的にそう感じていてるだけ。
 （とにかく、一通りのことをやつたら挨拶しに行こう）

初めての一人暮らしで、不安なこともたくさんあるけれども何とかなる。そう自分を勇気づけて、私はこれから我が家となる部屋の扉を開けた。

まさか本当に帰り道に大家さんが探していた新しい入居者とやらに出くわすとは思つていなかつた。神様つていうのがいるんなら、随分と悪趣味な悪戯をされたもんだと小さくため息をつきながらスーパーで買つてきたものを冷蔵庫に入れたりする。

その最中、あの綺麗な青緑色の髪をした女の子のことを思い出す。腰まで届きそうなほどのツインテールに女を見る目的ない俺ですらも分かるほどの可愛い顔。そして聞いたものを引き込むあの歌声……：

他人、特に女子なんて今までこれっぽっちも気にかけたことがないというのに、妙に印象に残つていた。まるで一目惚れでもしたみたいだ。

(ハツ……馬鹿馬鹿しい。んな訳ねえだろ。あほらし)

自分で馬鹿らしいことを考えて即座に否定する。俺が誰かに好意的な感情を向けることなんて、この先一切ないだろう。そんなことをしたところで口クな目に合わないつていうのは中学時代に嫌という程思い知らされたんだから。
パツと見たところ気が強そうには見えないし、かといって裏でこそそと何かをしようとするような人には見えなかつたから彼女自身は悪い人じやないのかもしれない。

が、まあ別に彼女が俺を嫌おうがそうでなかろうが恐らく彼女の取り巻きが俺を嫌つてくるんだろうからそんなことは関係ない。迎える結果が変わることはない。

俺が努力をすればもしかしたら——なんてことを考えようとも思つたけれど、今までそういう類の努力は裏目に出るかまともな結果を出せずに終わつていることを思い出してすぐに止める。考えるだけ無駄なことに時間を使つても空しくなるだけだ。

(そういえば、あの人は一体いくつなんだろうか。パツと見俺と同じくらいに見えたけど)

飲み物を買いに行つたついでに買つてきたポテトチップスの袋を開け、バリボリとむさぼりながらぼんやりとそんなことを考えてみる。年が離れていればそこまで付き合う必要もないだろうが、同年代だとすると少々厄介だ。同年代だとするとこの時期に引っ越してくるということは十中八九俺と同じように進学してきたということだろうし、何よりこの辺りに高校は一つしかない。

となれば同じ学校に進学する新入生同士となるわけで、さらに運が悪ければ同じクラスになるかもしれないということだ。まあ、そんなことは天文学的な確率だと思つてからあまり心配はしていないが。

とにかく、同じ学年ということは図らずも学校で顔を合わせなくてはならないということで、それはそれで面倒なことになりかねないということだ。同じアパートに住んで

るからと言つて面倒に巻き込まれないことを切に願う。俺が吹つかけなくとも、相手の方から吹つかけてくる可能性は決して低くない訳だし。

そう思つたら、ついつい大きくため息をついてしまう。トラブルというものは厄介で、こちらが避けようとしていても向こうからぶつかつてくるのである。

高校ではひつそりと植物のように静かに過ごしたいな、などと思うが果たしてそう上手くいくだろうかとも思つてしまう。現に中学時代は――

ピンポーン……

中学時代の忌まわしい思い出を思い出しそうになつたところで、来客を知らせる気の抜けたチャイムの音が部屋に響き渡つた。

一体誰が、と考えておおよそ大家さんあたりだろうと思ひ玄関に向かう。特に問題行動をしたわけではないはずだから、なんか文句を言われるようなことはないはずだとい聞かせつつ扉を開けた。

しかし、そんな俺の予想を大きく裏切つて目の前に立つていたのはあの女の子だつた。そういうえば名前を知らないからなんて名前なのかわからない。

それにしていつたい何の用事でここにいるのだろうとやや困惑していると、女の子が少し気まずそうにしながらおずおずと話しかけてきた。

「あ……さつきはありがとうございました。隣の104豪室に引っ越してきた初音未来

です。これから色々とよろしくお願ひします」

つまり彼女はわざわざお隣さんである俺に挨拶しに来たということか。とても礼儀正しいその様は評価に値するしご苦労なことだとも思うが無駄なこつた。どうせ顔を合わせても話すことはなくなるのだから。

が、まあわざわざ挨拶しに来てくれたので最低限の対応はしておく。
「どうも。天川つす。よろしくお願ひします」

「天川君か……もしよければ下の名前も聞かせてもらつてもいいですか?」

目の前の少女……初音さんの意図が分らず思わず眉をひそめてしまう。下の名前を聞いたところでどうしようというのだろうか。俺の名字は決してありふれたものでもないはずだから、俺という個人を指し示すための認識票としては名字の天川だけで十分だと思うのだが。

しかしまあ、たかが下の名前だ。それに同じ学校に通うかもしない以上、いつかはばれる。今教えるも早いか遅いかの違いだけだろう。そう考えた俺は何ということもなくただ文字を読み上げるように名乗つた。

「駿。
天川 駿つす」

「駿君……いい名前ですね」

「…………」

別に自分の名前が嫌いな訳じゃないが、かといって好きなわけでもない。なのでいい名前だねと言われてもああそんなんだ程度にしか思えない訳で。それを表に出すのもなんだか失礼かなと思うわけだから結局のところ俺にとれるリアクションは黙り込むというものしかなかつた。

そのおかげでものすごく気まずい雰囲気になる。俺は俺でどうしてくれんだこの空氣、もう閉めてもいいかな。なんて思い始めてるし向こうも向こうで地雷を踏んでしまつたか!? みたいな焦った顔になつていて。いやまあ原因は俺なんだろうけど。

そんな状況をどうにかしようと動いたのは初音さんの方だつた。

「あ……えっとお……天川君は最近引っ越して來たつて大家さんに聞きましたけど、もしかして今年から高校生……？」

「まあ、そっすね」

「ホント!? それじゃあ同じ年なんですね！」

私も今年から高校生なんですツ! と嬉しそうに笑顔を作る初音さん。そりやそろか。自分の故郷から出て一人暮らしうつことは中学時代の友達なんかはほとんど周りにいらない訳だ。普通は寂しいだろうし不安で一杯なんだろう。俺はむしろ清々してるけどな。

それから二言三言言葉を交わして、お互い同じ高校に進学するということ（同じ年と

発覚した時点で確信していたから驚かなかつた)、入学式当日は一緒に行こうという誘いを受けた(正確には頼み込まれた)ので一緒に行くことを約束して別れた。

やつとのことで玄関を閉めると、なんだか急にどつと疲れが出てくる。途中からうすす思つていたけれど、初音さんは俺が苦手とするタイプの人種らしい。一緒にいると無駄に疲れるというか、振り回されるというか。もう既に植物のように静かに過ごすということが出来なさそうで頭が痛くなりそうだった。

ともかくにも、下手に関わり合いにならないほうがお互いの為だろうし入学式の朝だけ一緒に登校して後は基本的に顔を合わせない様に動こうなんて考えながら俺は再び部屋でポテチをむさぼり始めた。

先ほどのやり取りを思い返しながら、どこか満更でもないと感じている自分がいたような気がしたが気のせいだと決めつけてさつさと忘れた。

第3話 晴れやかな入学式、晴れない心

まだ春先のやや肌寒い朝。自分の体温で程よく温まつた布団の中でぬくぬくとしている俺の鼓膜に突然けたたましい音が叩き付けられた。

「んあ……うつせえクソが……」

そう毒づいて、心地よい睡眠時間を邪魔して来る元凶であるアナログの目覚まし時計のボタンを寝ころんだまま腕を伸ばして殴るように押してアラームを止める。

が、寝ぼけていたせいかちゃんとボタンを押せ無かつたようでアラームは止まらなかつた。まるでさつさと起きろと親にお小言を言われ続けているみたいだ。

「ハイハイわかりましたよ……」

別にそういうところでそれに応えてくれる人がいるわけじゃないが、そう呟いて体を起こし今度こそしつかりとアラームを止める。

ここ数日はアラームなんて設定してなかつたが、今日は高校の入学式。つまり今日から俺は高校生ということになる。

流石に初日から寝坊して遅刻だなんてかつて悪いにもほどがあるし、初音さんとの約束もあつた。だから今日初めてこつちに引っ越してきてから買った目覚まし時計のア

ラームを設定していたというわけだ。

基本的に俺は時間厳守が当たり前だと思つてゐるからアラームの時間も早めに設定してある。滅多なことが無ければ家から歩いて20分くらいで学校に着けるのだが、何かしらのトラブルが起きるかもしれない。

備えあれば悪いなしともいうわけだし、早め早めの行動をとつておいた方が色々と楽なのだ。主に精神的な面で。

そんなこんなでゆっくり、しかしだらだらしすぎない程度に登校する準備を進めていふうちに時計の針は7時45分を指してゐた。初音さんと落ち合う時間は8時なのでまだ少し余裕がある。

とは言つてももうやることがない。かといつて何かをするには時間が無さ過ぎるし、何もしないで待つには少し時間がありすぎた。

ほんの少しどうしたものかと悩むが、どうしようもないでの素直に早めに家を出て初音さんを待つことにする。一応スマホがあれば多少の時間は簡単に潰せるし。

そうと決まれば行動を起こすまでは早かつた。窓がしつかり施錠されているか、ノートPCやゲーム機に電源が入つていなかを確認し、最後に忘れ物が無いかカバンの中を確認する。

すべて大丈夫であることをしつかりと確認した俺は、すたすたと玄関まで歩いて行つ

た。

「……行つてきます」

別に誰も俺に返事をしてくれるわけじやない。けれど、何となく部屋の方を見てそう呴いた。きっと今までの癖だろう。つい一週間ほど前までは親父がいたから。そんなことを考えて、少し目を細める。今更ながら本当に一人暮らしを始めたんだなという実感が湧いてきていた。

寂しいとか、そんな風に感じているわけじやない。断じて。ただ、一人になつたといふのは気楽になつた反面張り合いがなくなつたとも言える。

一人暮らしを始めてからようやく一週間経とうとしているけれど、とても気楽なものだ。親にあれこれ言わされることもないし、氣を使う必要もない。本当に自分の好きなようにできるのだから。

もちろん今まで親がしてくれていたことを自分でしなければならないから面倒に感じることも多いけれど、それを補つて余りあるほどの自由さと言えるだろう。

だけど、やはり話し相手がいないというのも退屈に感じたのは確かだ。一人で飯を食う時、一番それを感じた。軽口をたたきあえる相手がないと、食事も本当にただの作業と化してしまう。

そこまで考えてハツと我に返る。これじやあまるで自分がいまだに親離れのてきて

ないガキみたいじやあないか。15にもなつて親離れできていなかつて、恥ずかしい
にもほどがある。

俺は断じて親父に依存なんかしていない。しているとすればむしろ親父が俺に依存
しているのであつて、決して俺のほうじやない。

なんて考へているうちに、スマホの時計が8時になつた。初音さんとの集合時間だ。
……その肝心の初音さんはまるでくる気配を見せないが。

まあ女つて生き物は準備に時間がかかるものだから多少の遅刻は仕方ないだろう。
本当には仕方がないで済ませたくはないけれど、そういう風に思つて諦めておいたほうが
精神的に楽なのだ。わざわざストレスのたまる方向に物事を考へるほど俺もマゾヒ
ストじやない。……多分、そうだと信じたい。

それから約10分。未だに姿を現す気配すら見せない初音さんに対して流石にピリ
ピリしてしまつた。いくら準備に時間がかかるとはいへ、10分も遅刻するのはど
うかと思う。別に学校に行くだけなのであつて、旅行に行くとかそういうわけではない
のだからそんなに準備に時間がかかるとは思えないのだが。

一緒に行くと約束を交わした手前、来るまで待つほうが良いんだろうけどこちらは既
にかなりの時間待たされている。

スマホのバッテリーだつて無限というわけではないし、何より入学式から遅刻だん

ていくらなんでもたるんだと思われかねない。クラスメイトからの印象なんて気にしないけれど、教師陣にそれで目をつけられてしまうのだけは勘弁願いたい。

そこまで考えて俺が出した結論は、集合時間を指定したのに遅刻してくるやつが悪いということで先に一人で登校するというものだつた。

いや、実際その通りだと思う。慈悲はない。というか集合時間を過ぎてから10分も待つてやつたのだからまだ有情なほうだと思う。恨むなら時間までに家を出れなかつた自分を恨んでくれ初音さん。

「あ！天川君、待つて!!」

どうやら眠り姫様はようやく家を出てきたらしい。時間にして13分の遅刻だ。実際に遅い。

なので足を止めてこちらに向かつて走つてくる初音さんを肩越しに見返して、またそそくさと歩き始めた。

正直いちいち突っ込んでやる気にもならない。とりあえず彼女が時間に厳しい人種でないことが今日証明された。

とりあえず今後、初音さんと待ち合わせするとするならそこを頭に入れて行動したほうが良いのは間違いないだろう。そんな機会が二度とないことを願うけれど。

「いやあ、本当にごめんなさい。昨日ドキドキして疲れなかつたら朝起きれなくつて

……」

ようやく追いついてきた初音さんが横に並んだとたん、息を整えながら聞いてもいな
い言い訳を語り始める。

しかし入学式程度で興奮して眠れなかつたとは理解に苦しむ。林間学校とか、修学旅
行とかならばまだわからなくもないけれど今日はあいにくとただの入学式である。興
奮する要素がどこにあるというのだろうか。

「それにしても楽しみだなあ。どんな人に会えるのかな。友達たくさんできるかなあ
！」

こいつあれか、友達百人できるかなを地で行くタイプの人種か。やはり俺とは相いれ
ないタイプの人種だった。頼むから俺と一緒に行動をするのは今日限りにしていただ
きたいところである。

「ところで天川君は今日から行く学校に知り合いとかいるの？」

「いないよ。だからこの高校にしたんだ」

「え……？」

一瞬、俺の言葉がうまく呑み込めないといった表情をする初音さん。まあ普通はそう
だろう。

知り合いがないから、わざわざ一人暮らしになつてまでここに進学してきたなどと

いうおかしな理由を持つ高校生など日本中を探しても俺くらいなものだろう。他にもいるかもしれないが、相当のアケースであることに違いはない。

けれども俺は、アケースだろうと何だろうともこの選択に後悔はない。少なくとも今のところは正しい選択をしたのだと思っている。

後はこれまでのように悪目立ちしないように大人しく過ごしていればこれから三年間、特に大きな面倒ごとに絡まれるようなことはないだろう。火のないところに煙は立たない。火種さえ起こさなければ炎上することも避けられよう。

……寂しいとは思わない。決して。変につるんで後から繋がりを断ち切られる痛みに比べれば、繋がりを持たない空虚さのほうがまだマシだ。

「ね……ところで天川君はさ……」

先ほどからひたすら初音さんは下らない世間話の類の質問を繰り返して来るが、その全てを俺は生返事で返す。彼女には申し訳ないが俺は友達の枠からは外させてもらいたかった。

彼女は彼女でちゃんとして応対をしてもらえたかったことに不満であるようだが、むしろ不満に思つて貰つた方が都合がいい。

それに、どうしてもお喋りをしたいならどうか学校で別の人を見つけてほしいものだ。

時間に間に合うか少しひやひやしたが、思ったよりも早く到着したので昇降口に張り出されたクラス分けの紙を見て自分の名前を探す。

当然他の新入生も大勢いるから、奴らにもみくちゃにされながらも自分の学籍番号と紙に書いてある名簿とを照らし合わせて何とか自分名前が書かれているクラスの紙を見つけた。

(……俺は三組か)

この学校は特に成績によってクラスを分けられたりしているわけではないから、どのクラスに入れられようともそこまで差がない。だから、本当にどのクラスでも気にしていなかつた。

この時までは。

とにかくさつさと教室まで行つて、早めに席についてのんびりとしたいところだ。こう人が多いとどうしても人酔いを起こしそうになる。

それに、ここまで騒がしい空間はどうにも肌に合わない。無駄にエネルギーを消耗してしまう前にここから離れるのが得策だと俺は結論付け、そそくさとその場から離れた。

教室までの案内板に従い、どうにか迷うことなく自分の教室を探し当てて自分の学籍

番号が書かれたシールの張られている席に座る。

教室には既に半分くらいの生徒が集まっているようで、知り合いつぽそな連中はそれぞれ集まつて喋つていた。その光景を見て、別に驚くようなことはない。いくら中学以上に広範囲から様々な生徒が通学するとは言え、そのほとんどは地元中学から進学してきた生徒たちの方が俺のような他所から来た奴よりも断然多いのだからこんな光景は決して珍しくもなんともないのだ。

当然知り合いが一人もいない俺は暇だし何となく体がだるく感じられたので、担任の先生が来るまでは机に突つ伏して寝ることにした。

持つてきたかばんを机の上に置きその上に腕を置いてさあ寝ようとそのまま突つ伏そうとした瞬間、隣の席の椅子が引かれる音が聞こえた。そしてさらに聞き覚えのある声も聞こえてきてしまった。

「あ、天川君も三組だつたんだ。それなら一緒に来てくれても良かつたのに」
「……すまんな」

最悪だ。よりもよつてこんな目立つ奴と同じクラスだなんて。それも妙になれない。れしく俺に構つてくるのがもつと悪い。これでは嫌でも目立つことになる。

頼むからこれ以上俺に話しかけないでくれと心の中で念じながら、初音さんを横目でちらつと見てからすぐに突つ伏そうとした。

だが、その瞬間に教室の扉が開かれこれまた独特な雰囲気をした人物が入ってきた。
「皆の者、着席するでござるよ」

服装はいたつて普通にスーツを着込んだ男性だが、目立つのはその髪。紫色で、後ろで束ねた腰までかそれ以上に長い髪の毛。

そして何より特徴的なのは、生まれてくる時代を間違えてきたのではないかと錯覚してしまいそうになる言葉使いだった。

「拙者は今日から一年三組の担任を務める神威がくぼと申す。自己紹介は後でするとして、今から今日のこの後の日程について説明するでござるよ」

正直な話、余りにもイロモノな教師が出てきたことに軽いめまいを覚えそうになる。教師としての技量や知識が十分であるのなら良いが、それにしたつて訛っているというわけでもないのに標準語を使わない教師などよく雇おうという気になつたものだ。

しかし特に性格がぶつ飛んでるということでもないらしく、そのまま淡々とタイムスケジュールを通知されたところで俺達は入学式をする為に体育館へと向かうことになつた。

「ただいまより、第三十九回有賀島高等学校の入学式を始めます。新入生、入場」
まあ特に変なことが起きるはずもなく、平凡な入学式が始まつた。きっとこれから一

時間ほど退屈な時間が続くのだろうと考えると今から眠くなつてしまふ。
だが、その考えはすぐに改めさせられることになつた。

「校長式辞」

司会のアナウンスに応じるように校長らしき人物が壇上に登る。懐からカンペを取り出し、少し咳払いをしてその人物は話し始めた。

「新入生のみなさん、まずはご入学おめでとうございます。私はこの学校の校長を務めております甲長兄こうちょうけいと申します。あだ名はコウチヨウでした」

にこやかな笑顔で寒いジョークを飛ばす校長に開いた口が塞がらない俺。しかし、周りの奴等には面白かつたらしくそこかしこでクスクスと笑つている声が聞こえた。

周りの連中とはどうやら感性も違うらしい。いよいよもつて俺は悪目立ちしない様に立ち回る必要がありそうだ。

それからは特に笑うようなことも（そもそもこういう場所でそういう事が起きること自体おかしい）、ハプニングがあるわけもなく普通に入学式が終わつた。

そして新入生がそれぞれの教室へと戻つていく。俺達もそれに倣つて自分たちの教室へと戻つた。

全員が席についていることを確認すると、例のエセ古代人じみた教師が自己紹介を始

めると言い出した。まあ、ある種の通過儀礼ではある。

「それでは早速拙者から自己紹介しよう。先ほどは名前だけだったから今度はもう少し詳しく紹介していくでござるよ」

やはり語尾がおかしい。ござるってなんだ。サムライか何かか。

「拙者の名前は神威がくぼ。好きなモノはナスと自然で、苦手なものはでいじたる?とかいうものでござる。まだ皆分らないことがたくさんあると思うが、どんどん聞いてほしいでござる。これから一年間、よろしくお願ひ申す」

スマホがこれだけ普及している現代において、デジタル機器が苦手であるとは致命傷ではなかろうか。本当にこの先生は生まれてくる時代を間違えてしまつたのではないのかと柄にもなく同情の念を覚えずにはいられなかつた。

その後生徒の自己紹介の番になつたが、様々な奴らがいた。普通に自己紹介する奴、受けを狙いに来てる奴、途中で何か語り始める奴。色々いたが初音さんの番が回つてきたらしく、彼女は教壇へと立つた。

「えつと、初音未来です。好きなことは歌を歌うこと。将来の夢とかはまだ決まってないけれど、これからこの学校で皆と仲良くやつていけたらいいなと思つてます。よろしくお願ひします！」

初音さんが教壇に上がる直前から少しづわめていたのは聞こえていたが、彼女が自己

紹介した途端一気にあちこちで小声で会話をする輩が増える。

「見たがよあの子。めっちゃ可愛いな！」

「可愛いなあ。それにすつごいいい子そう」

勿論その声は本人にも聞こえているが、当の本人は少し恥ずかしそうに顔を赤らめてうつむき加減に下を向いて自分の席へと戻る。だが、まんざらでもなさそうな表情をしていた。

それから俺の番が回ってきたが、別に特にいうこともないので当たり障りのなさうことだけを述べてさっさと自分の席へと戻った。

その時「感じの悪い奴」だとか「根暗っぽそう」という声が聞こえたが、特に気にしなかつた。むしろそうやって俺のことを遠ざけてくれた方が俺としては助かるから作戦通りと言えば作戦通りだ。

それから翌日以降のスケジュールについての連絡などがされ、ホームルームが終わつた。

高校生活一日目が何とか無事に終わったことに胸をなでおろしつつ、さっさと家に帰ろうと教室を後にする。

初音さんは既に入気者となっていたようで、クラスの連中に囲まれていたのでこれ幸

いと放置した。

それから早足で昇降口を抜け、人ごみの凄まじいエリアを一気に抜ける。校門までの道なりに様々な部活の勧誘があつたがすべて無視し、ようやく校門を抜けた頃には大人もまばらになつてきていた。

特に話し相手がいるわけでもないから一人でぼうつと空を眺めながら家までの道を歩いていると、後ろの方からパタパタと革靴の足音が響いてくる。

大方早く家に帰つて遊びたい奴が走つているんだろうとかほんやりと考えながら空

を眺めたまま歩調を変えることなく歩き続けた。
だが、その足音は俺に近づいてくると一気にその速度を緩める。そして、またも聞きなれた声が聞こえた。

「はあ……はあ……やつと追いついた！　もう、天川君私のこと置いて行っちゃうんだから！」

「……あんた、なんで俺なんか追いかけてきたんだ？　お友達いっぱい出来たんだからそつち優先すればいいだろ」

正直言つて迷惑だつた。一緒に登下校などすれば変な噂が立つのは明らかだし（初音さんは女に疎い俺が見ても可愛いしな）、それが原因でトラブルが起きたつておかしくない。

だからこそ放つておいてほしくてさつさと一人で帰つて来たというのに、こいつはわざわざ俺を追いかけてきたというのだ。

「確かに友達はいっぱい出来たよ。でも、私は天川君とも友達になりたいから本当に、理解が出来ない。どうしてそこまで俺に固執するのか。俺どこいつは、まったく逆のタイプの人間だというのに。」

とにかく距離を取りたかった。折角中学時代の連中と縁を切る為にはるばるこんなところに出てきたというのに、あの時の二の舞になるのだけはごめんだつた。

だから、ため息を一つつくと初音さんの方に向き直つて正直に言うことにした。

「俺は、アンタと友達になる気はない。だから放つておいてくれ」「どうして？」

「んなことアンタに関係ない。じゃあな」

いやあな、と言つてそそくさと歩き出すが初音さんは俺の後をついてくる。当然だ、アパートの部屋が隣同士なのだから帰り道も同じ。

しかしこのままついてこられるのもなんか気分悪いので適当な路地へと道を逸れて彼女を撒くことにした。

「天川君、そつちはアパートじゃないよ！」

後ろから戸惑つたような初音さんの声が聞こえたが、無視をしてそのままどんどんと

進んでいった。

もう、後ろからついてくる足音は聞こえなかつた。

そのことに胸をなでおろし、再び空を見上げる。だが、どうしてだか綺麗に晴れた青空が俺をバカにしているように見えて直ぐに視線を前へと戻す。

再び足を前に出す前に足元に転がっている石ころを思いきり蹴飛ばした。

邪魔者を撒いたはずなのに俺の心はどこか荒れていて、でもどうしてそうなのかが分らなかつたから余計にイライラする。

原因の分らない気分の悪さにイライラしながら、俺は再び歩き始める。

空は、俺の心とは裏腹に相変わらず変わることなく綺麗に晴れていた。

第4話 独りの少年

初音さんから逃げる様に帰り道を外れた俺は、当てもなく辺りをさまよっていた。何も考えず、ただただ分かれ道に突き当たる度に右へ左へと曲がっていく。

そんなことをしている内に、俺の目の前には長い階段が現れた。階段の横には『有賀島公園』と言う木で出来たありふれた立札が立っている。

階段の両脇には桜の木が大量に植えられており、文字通りの桜のトンネルを作つていた。そよ風が吹くたび、枝が揺れて花びらが舞っている。

そんな光景を目にして何となく右手を出すと、一枚の花びらが俺の手に乗りそうになる。かと思つたが、花びらは指をすり抜けて落ちて行つてしまつた。

「あ……」

花びらが指の間をすり抜けて落ちていったのを見て、思わず小さく声が漏れる。空に向かつて開かれた俺の手のひらには、何もない。

地面に落ちた花びらをもう一度見て、それからまた空っぽの手のひらを見つめる。まるでそれは、これから俺の人生を象徴しているような気がした。

ふつと息をつき、空っぽの右手をグッと握りしめる。それから、上へと続いているで

あろう長い階段を見上げた。

桜のトンネルで彩られたその階段は、まるで天国へと続く階段のようにも見えた。もしかしたら、ここを昇つてみたら本当に天国へと行けるのかもしれない。

そんな馬鹿げたことを考えながら、ゆっくりと階段を昇つていく。一段一段、ゆっくりと。

綺麗に整備された階段は、特に足を引っかけそうなどころもなく昇りやすい。桜の時期というのもあって、足元は常に桜の絨毯で埋め尽くされている。

そんな桜色の階段と、ピカピカの革靴を眺めながら俺はゆっくりと階段を昇つていく。

そうして昇り続いているうちに、桜の絨毯が敷かれた階段は唐突に終わりを迎えた。階段を昇り終えたのだ。

階段上に待ち受けている光景を見るべく、俺は顔を上げて前を見る。

そこには桜色に染め上げられた空間が存在していた。地面も、植木も、ベンチも、全てが桜色に染まっている空間だった。

そんな光景を目の前に、俺は言葉を忘れて立ち尽くすしかなかつた。具体的な言葉なんか思いつかない。ただただ『綺麗だな』という感想が思いつくだけだ。けれど、驚くことにその空間には俺一人だつた。こんなに綺麗な場所に、俺一人しか

いなかつた。辺りに響くのは小鳥のさえずりと、そよ風が木々を揺らす音だけ。

だから俺は、ふらりとした足取りで奥へと進んだ。もつとこの美しい空間に溶け込んでいきたかった。他に誰もいない今なら、それが出来るだろう。

階段から少し進むと、唐突に視界が開ける。一か所だけ、桜の木々がないエリアがあつた。どうやら展望台の様で、そこからは有賀島町が一望できた。

学校も、駅も、商店街も全てが見渡せた。きっとあそこでは色んな人がいつも通りの日常を送っているのだろう。時間やお金、仕事、課題、色々な物に追われた人達がせわしなく動いているに違いない。

しかし、この場所だけは違う気がした。人々の生活と切り離された特別な場所。ここに来れば何もかもを忘れていられるのではないか。そう思わずにはいられなかつた。

とにかく、今は学校やその他のことなんて何も考えずにゆっくりとしたかつた。そう思い、振り向くと丁度いい具合にベンチがあつた。このベンチも他の物と同じように桜色に染め上げられている。

自分の座るスペースの分だけ、ベンチに広がつた桜の花びらを払つてゆっくりと腰を下ろす。背もたれに背中を預け、ゆっくりと目を閉じる。すると色々な物が感じ取れた。

遠くから聞こえる町の喧騒、頬を撫でる優しい風、木々の隙間から俺に降り注ぐ暖か

な太陽の光。全てが心地よく感じられる。

やがて、それらがゆつくりと遠ざかっていつて、俺の意識は緩やかに闇の中へと落ちていった。

・・・

誰かに呼ばれている気がした。

聞き覚えのある、澄んだ綺麗な声。

「……君！ 天川君！」

「ん……？」

重たい瞼を少しだけ開ける。途端に眩い光が俺の視界を埋め尽くした。

「うつ……」

突然強烈な光を目にして驚いた俺は、思わず俯いて瞬きを何度もしながら軽く頭を左右に振る。

その後、ゆっくりと顔を上げるとそこには太陽を背に立つ初音さんがいた。

一度家に帰ったのだろう。服装は赤い上着（カーディガンというのだろうか）にチエツク柄の洋服（トップスとボトムスで別れていないところを見るにワンピースなる物）を着ている。

「あ、やつと起きた」

「ああ……？」

とにかく状況が呑み込めない。いや、この状況的に初音さんが俺を起こしたのだろうけれど、どうして都合よく彼女が俺の目の前にいるというのだろうか。

そんな疑念が顔に出ていたらしい。初音さんは小さくため息をついて、今の状況を説明してくれた。

「あの後いつまで経つても帰つて来る気配はないから、散歩がてら歩いていれば見つけられるかなと思って歩いてたの。そしたらここで天川君を見つけたってわけ」

「……ああ、そう」

随分と不確実な方法で探そうとしたものである。いくらそこまでの都市ではないとはいえ、歩いて移動するには有賀島市は広すぎる。確率で考えれば会えない方がずっと高い。

最も、初音さんも『散歩がてら』と言つていたから本気で探す気はなかつたのだろう。むしろ本気で探されたらこつちが困る。

「こんなところでお昼寝なんて……いくら春になつて温かくなつたつていつても……」「人の心配より、自分の心配をしておけよ」

「つ……！」

傍にある鞄を手に取りながら立ち上がって出した声は、自分でも驚くほど冷たく低い声だった。

それは本気の拒絕を示す声。中学の時、何度もなく他人に向かつて使つた俺のたつた一つの声。

どうやらその声^{ふき}は錆びついておらず、そしてそれは初音さんには効果できめんだった。

驚きと、戸惑い。そして気まずさだろうか。目を見開き、それから泳がせる。

何かを言おうとして、結局何も言えずゆっくりと閉じられる半開きの彼女の唇。何も言えない自分への失望、憤り^{いきどおり}からかグッと握りしめられる両の拳。

それでもこの場を立ち去ろうとせず、何かを言おうと模索している。

こんな反応をされたのはいつ以来だろう。余りに久しぶりに見る反応に、思わずこちらが動きを止めてしまう。

だつて今まで、この声^{ふき}を振りかざしてきた相手は基本的にため息をついて嫌味を言うか、その場を立ち去るかの二つに一つだつたのだから。

唯一たつた一人だけ、例外がいた。

親父だ。親父だけは、他の奴らとは違っていた。

不器用で、気の利いた言葉なんて言えるような性格でもないくせに、必死になつて何

か言おうとしていた。

結局口にしたのは『なんかあつたら俺に話せよ』なんてバカみたいなセリフ一つだけ。初音さんはそんなこと言わないだろうし、言えないだろうけど。

どうしてだか、あの時の親父に被つて見えた。

それがなんだか俺をモヤモヤした気分にさせる。今すぐここを離れたいという気持ちをより追い立てる。

だから俺は、逃げるように初音さんに背を向けて歩き出した。

後ろから俺を呼び止める声が聞こえる。無視をした。

歩く。歩く。どこへ向かっているのか自分でも分らない。

とにかく曲がり角があれば曲がり、分かれ道が来れば迷うことなくどちらかの道を選ぶ。

気が付いた時には、自分の部屋の前についていた。

思わず、隣の——初音さんの部屋の玄関に目をやつてしまう。

ぴたりと閉じられた扉は、既に住人を招き入れた後だろうか。それとも、未だ帰らぬ住人を待つているのか。

どちらにしても、物言わぬ扉は俺に何を教えてくれるわけでもない。

視線を前に戻し、ポケットから部屋の鍵を取り出して鍵を開け、扉を開けつつ部屋の

中へと足を踏み入れる。

「ただいま……親父イ、飯の……」

そこまで言つてから自分が何を言つているかに気付き、氷漬けになつたかのような錯覚を覚える。

驚きの余り、開いた口が塞がらない。誰に言い訳するわけでもないのに、勝手に目を泳がせてしまう。

どうしようもなくなつて、肺の中に残っていた酸素を絞り出すように息を吐き出す。

そのままフラフラと部屋の中心に敷いてある布団の方へと歩いていき、どさりと腰を下ろした。

なんというか今日一日だけで、ものすごく疲れたような気がする。というか、実際すごく疲れた。

公園のベンチで眠つたくせに、また眼気が襲い掛かってきている。

制服にしわをつけるわけにはいかないから、寝間着に着替えはするけれども、着替えたらすぐに眠つてしまいたいくらいには眠い。

着替えたら、寝よう。疲れた、というのも事実だし、それ以上に精神的になんだか大分参つてているみたいだから。

第5話

入学式が終わり、一週間が経つた。

あれから初音さんは一言も言葉を交わしていない。

いや、初音さんから話しかけてくることは何度かあった。けれども、それをことごとく俺が無視をしたのだ。

悪い、とは思わない。確かに彼女にとつては辛いことだろうけれども、これから高校三年間を考えればそんなもの一瞬だ。

俺と関わり合いになつた奴は、ろくな目に遭わない。俺自身としても、誰かと関わればろくな目に遭わない。

だから、誰かと関わることは絶対に避けなければならぬのだ。関わつたとして、せいぜい学校行事の時に最低限会話をするくらいか。

そうすれば自然と周りは俺との関わろうとは思わなくなる。そして皆が嫌な気分になることも無くなるはずだ。

だというのに。

「あ、天川君！」

俺はそう言うシナリオで高校生活を過ごしたいと願つてやまないのに。

「ねえねえ、一緒に学校行こう?」

初音さんは俺に声をかけることを止めなかつた。

「今日はいい天気だね」

どれだけ無視をされても、俺がどんなに関わるなど言つても。

「今日つて、数学の課題の提出日だよね?」

初音さんは変わらず、笑顔で俺に話しかけてくる。変わらず、花が咲いたような笑顔で。

「私、数学つて苦手なんだ。どうしてもこう……好きになれないっていうか」

どうして彼女がここまで俺に関わろうとするのか、理解ができない。

「天川君はどう?」

俺は別にアラブの石油王とか、どこかの王子様だつたりとかするわけじやないのに。

「…………」

ただの、疫病神だつていうのに。

「……そ、そういうえば、今日はグループ実習があつたんだつけ」

周りに何を言われても、彼女が俺に声をかけることを止めることはなかつた。

「同じ班になれるといいね!」

どうして、彼女は俺に屈託のない笑顔を向け続けられるのだろう。

既にクラスの中では俺は孤立しつつある。そういうように俺が行動した、努力の成果とも言えるだろう。

だが、初音さんはその努力を無駄なものにしようとでもいうのだろうか。平穏無事な高校生活を、俺に送らせるつもりがないというのだろうか。

「……川君？ 天川君！」

「ツ…………」

そんな思考の海に沈んだ俺を、初音さんの声が現実へと引き戻す。辺りを見渡せば、既に学校の校門前までやってきていた。

「学校ついたよ。早く行こう？」

綺麗な花が、その手のひらを俺の目の前に差し出す。俺にはあまりに綺麗すぎる、その手のひらが眩しくて。

「どうして俺に構うんだ。ほつといてくれ」

彼女の横を通り過ぎると同時に返したものは、ドブを流れる污水のように濁った言葉。それはズルズルと心の中に染みこんで、俺の心も腐らせる。

でもそれでいい。元より俺の心など腐った果実みたいに崩れかけている。それに、いつも崩ちまつた方が楽になれる。

鉛のように重たくなつた体を引きずるように、俺は自分の教室へと向かう。そんな俺の近くに、初音さんの姿はない。

それでいいんだ。そうあるべきだともいう。そうすれば、もうあんな地獄は味わうこともないのだから。

自分の教室へ向かう途中にすれ違う奴、追い抜いていく奴、たくさんの学生とすれ違うけれど、誰一人俺を見ることない。大勢の人の中に、たつたヒトリ。願つてやまない、俺の理想郷。最高じやないか。

握りしめられた拳と噛み締められた奥歯を無視するようにそう言い聞かせて、俺は教室の扉を開いた。

入学式の日から一週間と少し。あれから天川君とはほとんどお話ができていない。

あの日、放つておいてくれつて言つていた天川君がどうしても気になつて散歩がてらとは言つてもあちこち歩き回りながら人のことを探し回つた。

しばらく歩き回ついたら、太陽も西に傾いた頃ようやく丘の上の公園で天川君がベンチで眠つているところをみつけられた。

いくら春になつて暖かくなつてきたといつても、太陽がなければまだ肌寒いんだから風邪でも引いたら大変だと思つて彼を起こしたけれども……

今思い出しても胸が痛くなるほど私のことを拒絶する声色に、何もできなかつた。

それから何日かは登下校のタイミングとかで話しかけてみたけれども、私の話に付き合つてはくれなかつた。結局、いつものとおり放つておいてくれと冷たく言われただけ。

正直に言つて、かなり傷ついた。私自身、別に自分のことを人付き合いが上手なタイプだと思つてゐるわけじやない。

けれどもここまで拒絶されることは初めてだつた。

嫌われることはあつても、拒絶されるということはほとんどなかつた。だから、辛かつた。

今日も私は一人で登校している。天川君はもう学校についているのかな。あの人は私と違つて朝はしつかり起きられる人みたいだから、遅刻するつてことはあまりないと思うけれど。

「みーくちゃん！　おはよう！」

ボンヤリとお隣さんのことを考えていたら後ろから元気な声が聞こえて、ポンと肩をたたかれた。

「あ、白川さん！　おはよう！」

声の主は昨日学級委員長に決まつた白川葵菜ちゃんしらかわあいなだつた。この子は入学式の日から仲良くなつた人うちの一人だ。

白川さんは明るくて優しいし、意外と物をハッキリという強いところもあつて憧れて
いるところもあるかな。できることなら卒業までずっと仲良くしてみたい。

「ねえねえ未来ちゃん。未来ちゃんはもう学校生活慣れた?」

「んー、まあまあかな。白川さんみたいな良い人とも友達になれたし、滑り出しは好調つ
て感じ!」

白川さんの問いかけに小さくガツツポーズして見せる。天川君のことは残念ではあ
るけれど、少なくとも私は今一人じゃない。それは素直に嬉しいことだつた。

そんな私の言葉に満足してくれたのか、白川さんは太陽のような笑顔を浮かべてくれ
た。

「そつかそつか! 委員長としても友達としても楽しい学校生活送れることが分かつ
て私は嬉しいよ!」

このまま素敵なクラスを作るぞ、と一人気合を入れている白川さんを見て思わず頬が
緩んだ。

それから白川さんと他愛のない会話を交わしながら学校の近くまでやつてくると、何
やら校門の辺りが騒がしい。

「んー? 何かあつたのかな?」

「さあ……」

一体何があつたんだろうと思ひながら近寄つてみると、校門の目の前にリムジンが止まつていてそこからレッドカーペットが昇降口まで敷かれていた。

「え、来る学校間違えたかな？」

そう呟いた白川さんは何も間違つていないと思う。正直私ですら目の前の光景が信じられなくて同じことを思つたから。

でも、校門の横にある『有賀島高校』と書かれたプレートが現実であることを示していた。

「……なんかすごい人が来るみたいだけど、遅刻しそうだから急げ！」

どうしてこんなところに来てまでこんなものを見なくちゃいけないんだろう。私は、こういうのを見るためにここに進学したんじゃないのに。

「未来ちゃん？ 大丈夫？」

余り思い出したくない少し前のことと思い出して気分が沈みかけたところで、葵菜ちゃんの声が私を現実へと引き戻してくれた。

「あ……うん。大丈夫。ほら、早く教室に行こう？ 遅刻しちゃうよ」

「え、あ……ちょっと未来ちゃん！」

葵菜ちゃんの手を引いて校門前で物珍しそうにリムジンやレッドカーペットを眺める他の学生を押しのけるように昇降口へと歩く。

こんなことなら、髪の毛を黒染めにでもしておけば良かったかもしない。
そんなことを考えつつ、どうかこのリムジンで送り迎えをされている学生と出会いませんようにと祈つた。